



—サンタランドのなかまたち—

びんのなかのてがみ

さく：G-tan

え：きむらりさ



サンタランドの南の海を見おろせる丘で、トナカイのウィーボとポツクルはおいしそうにバイソングラスを食べていました。二人はこの草が大好物。ちよつと苦いけど、それが元気の素になるのです。なにしろクリスマスには世界中を駆け回らなくちゃいけません。だから今のうちにどんどん食べるのです。

「モシヤモシヤ、あ、ワイマールだ!」

ポツクルにいわれて、高い空を見上げたヴィーボにも、すべるように飛んでくるかもめのワイマールの姿が見えました。胸には手紙でいっぱいにくらんだカバンを持っています。

「ハロー、ヴィーボ。ハロー、ポツクル」

クルクルと3回輪を描きながら、ワイマールが降りてきました。

「こんにちは、ワイマール。モシヤモシヤ」

「また子どもたちの手紙を持ってきたんだね」

「そうなんだ。もう11月だからね、だんだん増えてきたよ」

「ごころうさま。お茶でものんでくかい? モシヤモシヤ」

「ダメダメ。急がないと、日が暮れちゃうよ」

ワイマールはそういうと、ふたたび舞い上がって、丘の上にあるサンタさんの家まで飛んでいきました。そして赤い郵便受けに手紙を入れました。ドサドサドサ。カバンの中身はすべてサンタさん宛のものです。

チロチロリン。サンタさんの郵便受けは手紙が入ると鈴がなるんです。その音をききつけて、犬のワンダーが白い毛むくじやらの姿を見せました。

「こんにちは。ワンダー。手紙はおいたよ。じゃあねえ」

ワイマールは返事を聞く間もなく、飛び去りました。のんびり屋のワンダーのあいさつなど待っていられません。礼儀正しいワンダーは相手がなくなっても

「ワンワン。どうもありがとうだワン」といいました。



サンタさんの部屋には、赤い水玉模様の大きな箱が置いてあります。世界中にここにしかない魔法の箱です。サンタさんはこの箱で、世界中の子どもたちにプレゼントをつくっているのです。

「ほほう。今日はまたずいぶんたくさんの手紙がきたようじゃな」

サンタさんは、袋を目の前において、目を閉じました。封を開けなくても手紙を読むことができます。手紙には子どもたちのプレゼントの願いが書いてありました。

『いい子にします。だからクマさんのお人形が欲しい』

『大きな絵本だったらいいなあ』

『サンタさん、乗り物のおもちゃをください。』

いろいろなことが書いてあります。サンタさんにはっこり笑ったり、うんうんとうなずいたりしました。中には『自転車欲しいっていったけど、望遠鏡にしてください』なんていう手紙までありました。

でも、お願いしたものを必ずもらえるわけではありません。サンタさんは、その子にちょうどいいと思うものを考えてプレゼントするのです。だって5歳の子どもが『うでどけい』をもらっても、使えませんからね。

目をつむったまま手紙を読んでいたサンタさんの顔がとつぜんくもりました。

「これは・・・う〜ん」

サンタさんはそういういながら、手紙の山から1つのビンを取り上げました。ビンに入っている手紙だったので。そして手紙を出して広げました。

ワンワン。とても珍しいことなので、ワンダーも心配そうにのぞきこみました。その手紙にはこう書かれています。

『ボクにはお母さんがいません。サンタさん、お母さんをください』



サンタさんは便せんびんの裏側うらがわを見ました。『マルティンより』と書いてあります。手紙てがみをポケットの中なかに入れて、サンタさんはワンダーワンダーにみんなを呼ぶよようにしていました。

サンタさんの椅子いすの回りまわりに、サンタランドのみんなが集まりあつまりました。

黄色きいろと緑みどりの羽はねが自慢じまんのオウムのペロル。

いたずらいたずらそうな目めをしたアライグマのポビー。

おしゃれ好きすで、すらっとした姿すがたのハツカネズミのマリアン。

そしてトナカイのヴィーボとボックルです。

みんないつもは元気げんきなのに、今日はサンタさんの様子ようすを見て静しずかになってしまいました。

「さあ、みんな手てをつないで」

サンタさんにいわれて、みんなは手てをつなぎました。すると、みんなの頭あたまの中なかにマルティンの姿すがたが見えてきました。

マルティンは港みなとのある町まちにお父さんとうとふたりで住すんでいます。お父さんのお仕事しごとは大工さん。朝あさ早くからでかけるので、朝あさごはんを食たべてから、暗くらくなるまでマルティンはひとりです。お母さんかあは、マルティンがよちよち歩きあるをし始はじめた頃ころに、病びょう気でなくなつたのです。

もちろん、小学校しょうがっこうに行けばお友ともたちはいます。でも2学期がっきになつてから、お友ともたちはひとりふたりとだんだん減へつていきました。

「どうしてなの？」

マリアンがたずねました。

「まあ、見みていてっらん」

サンタさんはそうこたえてまた目めをつむりました。



学校の教室。マルティンはクラスのお友だちのセレナから、ピンク色のかわいい筆箱をとりあげて投げつけました。筆箱は壁にあたって、はじこの方がへこんでしまいました。えんぴつや消しゴムが床にちらばっています。

セレナが泣き出すと、マルティンはしばらくだまって見ていましたが、教室から逃げ出しました。

校庭では、何人かの友だちがボール遊びをしていました。マルティンはそのボールを遠くの方までけつとばしました。ボールはポーンとはずんで、学校の外を流れる川の中に落ちてしまいました。

友だちは怒ってマルティンにつかみかかりましたが、マルティンはひよいとよけると、そのまま学校の外まで逃げてしまいました。

そこまで見たところで、サンタランドのみんなが話しました。た。

「ねえ、マルティン君で悪い子みたい」とオウムのペロル。

「これじゃお友だちにはできないわよ」とはつかねずみのマリアン。

「ボクもマルティン君と遊ぶのはいやだな」とトナカイのヴィーボ。

「だけど、お母さんがいないのはかわいそうだよ」とポツクル。

「だからって、こんなイタズラしているのかよ」とあらいぐまのポビー。

マルティンはすなおなおない子だと思っていたので、みんなは少しショックでした。

サンタさんはずっとだまってみんなの話をきいてました。

「どうするの、サンタさん」

マリアンがききました。

サンタさんは白いひげをさわりながらこたえました。

「あわてちゃいかなぞ。みんな、もう一度、見てみないかね」

みんなはもう一度手をつなぎました。



さつきと同じマルティンの教室。セレナが自慢そうな顔で筆箱をお友だちに見せていました。

「ね、すてきな筆箱でしょ。お母さんに買ってもらったのよ。私はピンクが好きだから」

「きれいなえ。いいなあ。私も買って欲しいな」

とお友だちもみんなうらやましそう。

そこにマルティンがやってきました。マルティンは筆箱をちらりとみて

「な〜んだ。なにかと思つたら筆箱か」

といました。

「なによ。マルティン君なんかに見せたくないわ。あっちに行つてよ」

「へ〜んだ。そんなもん見たくないよ」

「私のお母さんが買ってくれたのに、そんないい方しないですよ。」

あ、そうか。マルティン君にはわからないわよね。お母さんいないんだし」

それをきいたとたんにマルティンの顔が真っ赤になって、セレナの筆箱を投げていたのです。

校庭に逃げ出したマルティンの目の前でみんながボール遊びをしていました。でもマルティンをみかけた友だちは、いっせいはやしたてました。

「あ、マルティンだ、マルティンだ」

「洗濯してない服きてるぞ。さわられると汚れるぞ」

「こっちに来るなよ」

そのうちの一人が、マルティンにボールを投げつけました。ボールはマルティンの背中にあたって足下に転がりました。マルティンはすぐにそのボールをひろって、おもいきりけとばしたのです。



その夜、いつもよりも遅く8時頃になってマルティンのお父さんは帰ってきました。

「おかえりなさい、お父さん」

お父さんは、着ていた上着を脱いで、じろつとマルティンの方を見ました。マルティンはびくつと立ちすくんでしまいました。お父さんが怒っているのがすぐにわかったからです。

「マルティン、おまえ学校で女の子の筆箱を壊したんだってな」

マルティンは恐くて、声がありません。

お父さんはやれやれという顔をして、椅子に腰掛け、マルティンの両腕をにぎりました。

「いいかい、マルティン。おまえがさびしいのはお父さんもよくわかる。もつとおまえと話をしたいんだけどそうそう時間もとれないんだ。だから、お友だちとは仲良くして欲しいんだよ」それから、お父さんはマルティンを抱き上げて、自分の大きなひざの上にのせました。

「男同士だからな、正直にいおう。お父さんもマルティンにどうしてあげるのがいちばんいいのか、よくわからない。お母さんには『マルティンのことは心配するな』と約束したっていうのにな。マルティン、おまえはどうして欲しい？」

お父さんがあまり怒らないので、マルティンは少し安心しました。でも、お母さんの話が出て、今度は悲しくなりました。

「なにも…ボクにもよくわかんない」

「そうか、そうか。それじゃあもう少し二人で考えようとするか。どっちがいいこたえをみつめるか競争だな」

「うん」

「そうだ、今度の日曜日にピクニックに行こう。それとも、お友だちをおうちに呼んでもいいぞ。お父さん、おいしいピザをつくるから。どっちがいい？」

マルティンは「ピクニック」とこたえました。もしも自分の家に友だちをさそっても、誰も来てくれないと思ったからです。それをお父さんにはいってはいけないとも思ったからです。



夜遅く、ベッドの中でマルティンはずっと考えていました。マルティンにはお父さんが困っていることがよくわかりました。

みんな自分のせいだということもわかって、とても悲しくなりました。

”ボクがいい子になればいいんだ“

それなのに、みんなに嫌われるようなことをしている自分がいやになりました。お母さんのことをいわれたり、仲間はずれにされると、どうしても頭の中が熱くなってしまうのです。

”お母さんがいないから、ボクは悪い子なのかな“

そのとき、マルティンは名案を思いつきました。

『そうだ！サンタさんにお母さんをプレゼントしてもらえばいいんだ』

ベッドから飛び起きると、マルティンはサンタさんに手紙を書き始めました。



ウォーン、ウォンウォン。いちばん泣いていたのは、ワンダーでした。

「もう、うるさいわねえ。もう少し静かに泣いてよね」

ペロルはそういいましたが、自分も涙まみれで自慢の緑と黄色の羽がぐしょぐしょです。他のみんなも泣いていました。

「そうか、そういうわけじゃったか」

サンタさんはマルティンの手紙を大切そうにポケットにしまいました。

「サンタさんのいったとおりだったわ。見えてることだけじゃわからないのね」

涙をふきながら、マリアンがいました。

「だけど、マルティンが悪いところもあるよな」

とボビーがいうと、ペロルがボビーの頭をつきました。

「なんてこというのよ。ボビー。あなた、お母さんがいなくなったらどう思うの?」

「いて。そんなことわかんないよ。あいてて」

部屋の中を逃げるボビーとおいかけるペロル。しかたなくヴィーボとポツクルが二人を引き離しました。

マリアンがサンタさんにいました。

「サンタさん。マルティン君に新しいお母さんをプレゼントするの?」

「残念じゃがな、マリアン。それはできないことじゃよ」

「じゃあ、マルティンはどうなるの?」

みんなも息をのんでサンタさんのこたえを待ちました。サンタさんはみんなを見回しました。心配そうな顔が並んでいます。

「わっはっは。みんないつになく真剣なようじゃな。それじゃあ、ひとつ、みんなにも協力してもらおうとしよう」

サンタさんにいいアイデアがあると知って、みんなほっとしました。それからマルティンへのプレゼントの相談を始めたのです。



日曜日のお昼前、マルティンは港の堤防の先つちよに一人で腰をかけていました。お父さんは仕事にでかけてしまいました。このところ雨が多くて、仕事がかどらなかつたから、お父さんは日曜日にも働かなければならなかつたのです。ピクニックに行く約束を守れなかつたお父さんは、何度もマルティンにあやまりました。

でもマルティンはそれほど残念じゃありませんでした。というのもピクニックに行くのが少し恐かつたからです。きつと別の子どもたちもピクニック山にいて、お母さんといっしょに楽しく遊んでいると思えたから。

「今度こそ絶対にピクニックに行こうな。帰りに何かおいしいものを買ってくるから、今日はお留守番しておくれ」

お父さんが出かけるとすぐに、マルティンはこの堤防にやってきました。寂しいとき、つらいとき、涙がどうしても止まらないときには、マルティンはこの堤防に来ることにしました。

キラキラと輝く水面と、堤防でくだける白い波。遠くの船の汽笛。カモメの鳴き声。その中にいるとマルティンは心が安まるのです。他に人がいないから、悲しいことも怖いこともおきないと思えるのでした。

今日はとてもいい天気でした。遠くの半島にある灯台もくつきりと見えています。絵を描くのが好きなマルティンは、その灯台と海をスケッチしていました。

そのとき、めずらしいものがマルティンの目に映りました。

「なんだろう？」

それはちよつと不思議なかつこうをしたカモメでした。赤い帽子と茶色い靴。カモメは灯台のすぐ脇を通り抜けると波につかまりそうなほど、低く降りてきて、まっすぐマルティンの方にやってきました。それは郵便かばんをさげて飛ぶワイマールでした。



ワイマールはマルティンのすぐそばに降りると、かぼんの中から、くちばしで手紙を取り出してマルティンに渡しました。びっくりするマルティンを見て、ワイマールはニツと笑ってから、ふたたび空高く登っていきます。サンタさんのたのみごとをはたせたので、ワイマールもごきげんです。

『こんにちは。マルティン。手紙をどうもありがとうございます』

手紙を見たマルティンは驚いて声もでませんでした。それはサンタさんからの手紙だったのです。

この堤防からビンに入れて流した手紙がちゃんとサンタさんに届いて、その返事が返ってきたのです。手紙にはこう書かれていました。

『プレゼントはもう用意したんじやが、かんたんに渡せるものじゃないのでな。クリスマススイブの夕方にまたここにおいで』
マルティンはその手紙を画用紙の間にはさみました。それから考え込んでしまいました。

サンタさんのプレゼントはいつたいたいなんでしょう。本当に新しいお母さんなのでしょうか。もしもそうなら、やさしいお母さんなのでしょうか。マルティンはうれしい気持ちと恐い気持ちをいつしよに感じました。

でも、この話は誰にもしませんでした。お父さんにさえ秘密です。



クリスマススイブの日がやってきました。マルティンは堤防に座って一人で待っていました。

あたりがだんだん暗くなってきたとき、マルティンの目の前に突然、けむりのようなものがあらわれました。そして次の瞬間には、そこから大きな白い光が現れて輝きました。

マルティンはびつくりして声もできません。白い光はとてもきれいでしたが、あまりにまぶしいのでマルティンは思わず目をつむりました。

チリリンと音がきこえました。

マルティンは目を開けてびつくり！

そこには大きな馬車が止まっていたのです。いえ、馬車をひいているのは、馬ではなく2頭のトナカイでした。そして、ぎよしゃの椅子に座っているのはくるくるつとした目のアライグマでした。

「こんにちは、マルティン。ボクはボビーだよ。それからこっちがヴィーボで、そっちがポックルさ。よろしくね」

自分のなまえを呼ばれても、マルティンはポカンと口をあけてつたつていました。ボビーは馬車の椅子から飛び降りて、マルティンのずぼんのひざのあたりをポンポンとたたきました。

「だいじょうぶだよ。ボクたちはサンタさんの仲間なんだ」

「サンタさんの？」

「そうそう。じゃあ、馬車に乗ってよ。ほらほら早く」

ボビーはマルティンを馬車の中に押し込みました。

「それじゃあ、出発進行。たのんだよ。ヴィーボ、ポックル」

「まかせてよ」

とヴィーボ。

「今夜のためにバイソングラスをたくさんたべたもんね」とポックル。

「わお。それじゃ元気いっぱいだな。じゃあ、行こうー！」チリリリリン！

ボビーが元気よく鈴をならすと、馬車はゆつくりゆつくりと空へ上り始めました。



馬車の中でマルティンを迎えたのはペロルです。

「ようこそ、マルティン。私はガイドのペロルよ。よろしくね」

「こんにちは。でもガイドつてなに？」

「この窓から見えるものを説明するのがガイドよ。さっそく始めるわよ。右手に見えてまいりましたのが、学校でーす」

ペロルにいわれるままに馬車の窓の外を覗くと、マルティンの学校が見えました。

「本当だ。ブランコがあんなに小さくなっちゃった」

初めて空の上から見る景色にマルティンは目を丸くしました。

「左手に見えてきたのが、ピクニック山でーす」

よく遊んだ山も川もみんなそこにありました。やがて馬車が雲の上まであがると、街はマルティンの片手にのっかってしまふほど、小さくなりました。

その様子を見ているうちに少し寂しくなつて、マルティンはふかふかのクッションにもたれました。

「お父さん心配しなかなあ」

すると、またまたびっくりすることがおきました。真っ白なクッションがしゃべり出したのです。

「大丈夫だワン。サンタさんがちゃんと考えてくれてるんだワン」

そうです。クッションだと思つたのは、毛むくじやらのワンダーだったのです。

「あー。びっくりしたあ。今日は驚いてばかりだ。君もサンタさんのお友だち？」

「ワンワン。ワンダーだワン」

「ダメじゃないの、ワンダー。あなたはクッションなんだから」

ペロルが注意すると、

「だってマルティンの涙が背中におちて冷たいんだワン」とワンダーがこたえました。

いつの間にか、マルティンの頬に大きな涙が流れていたのです。



「あらまあ、マルティン。幼稚園のお友だちみたいよ」

ペロルにそういわれたので、マルティンは目をゴシゴシこすつていいました。

「外を見て、目にゴミが入っただけだよ」

「ふふふ。じゃあ、ガイドを続けるわよ。左の方に見えてきたのが、おおぐま座です。北斗七星で有名な星座よ」

あたりはすっかり暮れて、窓の外はまっくらでした。そして小さな氷をばらまいたみたいに多くの星がマルティンを取り囲んでいました。ひとつひとつがいつもよりも大きくて、明るく輝いています。あたたかいワンダーのクッションに包まれて、そのすばらしい夜空をながめるうちに、マルティンは時間を忘れてしまいました。そしてペロルは星ぼしにまつわる話をたくさんしてくれました。

その頃、同じ夜空を見上げながら、サンタさんははつかねずみのマリアンに話しかけていました。

「準備はいいようじゃな」

「はい。いつでもいいですよ」

「ヴィーボとポツクルが戻ってきたら、私は世界中の子どもたちのところへ出かけなくてはならん。あとは、みんなにまかせるが大丈夫じゃな」

「はい。安心して行ってください。私たちサンタランドの住人だもん。このくらいのお手伝いなら、きちんとできます。でもね、サンタさん」

サンタさんは、マリアンのほうを見ました。

「なんだい」

「マルティン君、喜んでくれるかな」

「もちろんじゃ。みんなの気持ちもきつと伝わるじやろう」

サンタさんの言葉を聞いたマリアンは、うれしそうに笑っていいました。

「メリークリスマス サンタさん」

「メリークリスマス マリアン」



「さあ、ついたよ」

そういつてボビーが馬車のドアを開けました。マルティンはステップを降りながら、まわりの景色を見ました。そこにはマリアンが待っていました。

「私はマリアンよ。よろしく。もう準備はできているから、私についてきて」

マリアンの後をマルティンはだまつてついていきました。でも、ちようと様子が変です。

「ねえ、マリアン。ここはボクの町にそっくりだよ」

マルティンがそう尋ねると、マリアンはにっこり笑って答えました。

「そっくりなんじゃないなくて、あなたの町なのよ、マルティン」

「ええ？」

マルティンにはわけがわかりませんでした。あんなに長い時間空を飛んできたのに。

「でも、ちよつとだけ違うのよ。さ、ここよ」

マリアンが指さした家は、間違いなくマルティンの家でした。でも、どことなく違う気もします。いつも冷たい感じの家のなか、明るくあたたかな感じがするのです。

「こわがらないで、入ってごらんさい」

マリアンにうながされて、マルティンはおそろおそろのドアを開けました。

家の中には女の人がいました。女の人はオーブンの前を行ったり来たりして、何かをつくっていました。

マルティンはその顔をじっくりと見ました。すると懐かしい匂いが鼻をくすぐりました。

そのとたんにマルティンは、写真でしか知らなかったお母さんのことを思い出したのです



「お母さん！」

マルティンは思わず声をだしました。するとお母さんはマルティンの方を見てほほえみました。

「ああ、マルティン… 大きくなったわね」

お母さんはマルティンにかけ寄ってひざまずくと、やさしく抱きしめました。マルティンはどうしていいかわからずにいましたが、お母さんの匂いにつつまれるうちに涙があふれてとまらなくなりました。

マルティンはお母さんに抱きついて、泣きじゃくりながら何度も何度も「お母さん」と叫んでいました。

「どうして、どうしてボクを置いていつちやったの？ お母さん」
お母さんも目に涙をうかべて、何度も首をふりました。

「ごめんね、マルティン。お母さんもとつてもつらかった…。悲しくて悲しくて何度も泣いちゃったの。でもね、今は神様に感謝してるのよ。お母さんがいなくても、マルティンはこんないい子になったんだもの」

マルティンはびくつと身体をふるわせました。それから、ちよつと考えていました。

「ボクね。いい子じゃないんだ」

お母さんは少し身体を離して、マルティンの顔を覗き込みました。

「お友だちとケンカしちゃうから？」

マルティンは目を丸くして、

「お母さん、知ってるの？」

「そうよ。いつもマルティンのこと見てるの。だからなんでも知ってるわよ」

「仲良くしたいんだけど、ダメなんだ。そんなことしたくないのに、しちゃうの」

「そうなの。じゃあお話の続きはあとでしてしまおう」

お母さんはそういつて立ち上がり、マルティンの手をとりました。

「さ、いつちへいつちい。マルティンの大好きなクッキーをつくっておいたのよ」



お母さんはマルティンをテーブルにつかせて、いろいろな動物のカタチをしたクッキーとミルクを出してくれました。

「このクッキー覚えてる？ 赤ちゃんの頃マルティンが一番好きだったの」そのクッキーは象さんのカタチをしていました。クッキーはすごくおいしくて、ひと口食べると、もう次のひと口が食べたくなるくらいです。それに、昔のことをどんどん思い出させてくれる味でした。

「いちばん大きいからだよ」

「きつと、そうね。マルティンはくいしんぼうだったもんね」

マルティンはクッキーを食べながら、照れくさそうな顔をしました。

「それに、とても元気な赤ちゃんだったのよ。病気もぜんぜんなくて、他のお母さんたちからうらやましがられたんだから。歩きはじめたのもいちばん早かったわよ」

「ふーん。ボク、かけっこなら誰にも負けないよ」

「そうね。みんなマルティンの足が速いから、いいなあと思ってるわよ」

「そうかなあ」

「そうそう。この間、セレナの筆箱を壊しちゃったでしょ」

「ごめんなさい」

マルティンはお母さんにそのことにはいしよにしておきたかったのです。でもお母さんはそのことでしかりませんでした。

「セレナはね。赤ちゃんの時に病気をして、今でも上手に歩けないの。だから、マルティンが走るのをいつもうらやましそうに見てるわ。知ってた？」

マルティンは「ううん」と首をふってから、食べかけのクッキーをお皿に戻しました。急に自分のことが恥ずかしくなったのです。

「誰でもね、人をうらやましいって思う気持ちがあるのよ」

「ふーん」

「でも、それで人を傷つけてはいけないの。マルティンにもわかっているんでしょ？」

「うん。でもどうすればいいの？」



「お友だちとケンカしそうになったら、そのお友だちのことをよく考えるの。そして自分から話しかけてみるの。そうすればきっと仲直りできるはずよ」

「ほんとに?」

「ほんとよ。お母さんね。みんなと仲良くなつて、人に親切にできるマルティンになつて欲しいな」

「…」

マルティンが困った顔をしたので、お母さんはマルティンの手を取りました。

「人はたったひとりじゃ生きていけないわ。お父さんみたいにおうちをつくる人がいて、お魚をとる人がいて、学校の先生がいて、いろいろな人がいて助け合っているから生きていけるの。そうでしょ」

「うん。だから仲良くしなくちゃいけないだね」

マルティンがそういうと、お母さんはにっこり笑いました。

「そうよ。マルティンならわかつてくれると思つてたわ。さあ、それじゃあ今日はおいしいものをつくつてあげるからね」

マルティンはお母さんを手伝つてお料理をつくりました。それからいろいろな話をしながら、食事をとりました。お母さんは本当にお料理が上手でした。

そして久しぶりにお母さんといっしょに眠りました。

「そうだ、マルティン。これをあげるね」

ベッドの上でお母さんがくれたのは、ロケットのペンダントでした。フタをあけるとお母さんとマルティンがいっしょに写った写真が入っていました。

「いつまでもお母さんはマルティンのそばにいる。だからお父さんといっしょにがんばつて」

「うん。わかった」

「じゃ、約束よ」

お母さんは子守歌を歌いはじめました。いつかきいたことのあるその調べを耳にすると、マルティンはとっても安らかな気持ちになつて、いつしか眠つてしまいました。



「マルティン、マルティン」

お父さんの声に驚いて、マルティンは飛び起きました。すぐあたりを見回しましたが、お母さんの姿はどこにもありません。

「お母さんは？」

「なんだ、お母さんの夢を見てたのか」

「夢じゃないよ。本当にお母さんに会ったんだ」

「そうなのか。それならお父さんも会いたかったな」

お父さんは残念そうに呟いてから、後ろに隠していた紙包みをさしました。

「メリークリスマス、マルティン。お父さんからのプレゼントだ」

マルティンは急いで紙包みをあけました。

「わあ、どうもありがとう」

中から出てきたのは新しい筆と絵の具でした。

「すごいなあ。メリークリスマス！お父さん」

こんな嬉しそうな顔をしたマルティンをお父さんは久しぶりに見ました。

「じゃあ、お父さんはお仕事に行つて来るよ」

「うん、いつてらっしゃい！」

声まで変わったみたいに元気なマルティンでした。

お父さんがかけると、マルティンは自分の胸に手をおきました。

お母さんがくれたロケットはそこにちゃんとありました。

「やっぱり夢じゃなかったんだ。お母さんに会ったんだ」

マルティンはロケットを握りしめました。それからそつと匂いをかいでみました。お母さんの香がして、マルティンは幸せな気持ちでいっぱいになりました。

「サンタさん。どうもありがとう。ボク、みんなと仲良くするよ。お母さんが見てるもんね」



年としが明あけてしばらくした頃ころ、マルティンからサンタさんに手紙てがみが届とどきました。

サンタさんはみんなに読よんであげました。

手紙てがみによると、マルティンはお父とうさんにもらった絵えの具ぐと筆ふでで、クラスのお友ともたち全員ぜんいんの絵えを描えがいてみんなにプレゼントしたのです。そして、今いままでのことをあやまりました。

「今は毎日まいにちお友ともたちと仲良なかよく勉強べんきやうしたり、遊あそんだりしているそうじゃよ」

「よかったねえ」

「うん、よかった、よかった。みんなが助たすけてくれたおかげじゃよ」

サンタさんにほめられてみんなはとっても嬉うれしそう。

「それでな、マルティンからみんなにもお礼れいのプレゼントがあるようじゃ」

それはサンタランドのみんなが描えがかれている一枚いちまいの絵えでした。

「やった〜」

「マルティン、上手じょうずねえ」

「見てよ。この私わたしの美うつくしさ」

「絵えの方がきれいだなあ」

「なんですつてえ」

と、わいわいがやがや。マルティンが元氣げんきになったときいたので、みんなまで元氣げんきが出てきたみたいです。

マルティンの絵えはさつそくサンタさんの家いえに飾かざられました。きつと今いまでも飾かざってあるじゃしょう。

おしまい

こんど
てがみ
今度はどんな手紙がとどくのかな？





バリアフリー絵本・童話シリーズ

Dreaming Tales

私がこの話を書こうと思ったきっかけは「いじめ」でした。

平和で、人口が増え続けた日本にあって、その反動として膿のようにわいた現象だと感じています。差別をすることで、スケープゴートを作ることで、自己保身を図るような間違った本能の発現です。

人間は知識に加えて、社会性を持つことで繁栄してきました。その社会性を失ってしまえば、誰にとっても生きにくく、楽しくない世界ができてしまうのです。経済も文化も間違いなく廃れてしまいますから。「いじめ」という言葉が誕生してから30年ほどたちましたが、事態はよくない方に進んでいると感じます。「勝ち組・負け組」そんな言葉が使われるようになりましたから。言葉の持つ力は怖いのです。いつの間にか、皆がそうした価値観で動くようになります。負け組が誕生したとき、全員が負け組です。

これから人口がどんどん減少する中、今の子どもたちが愚かな大人たちの悪影響を受けなく、人間の本質に気づけるよう心から願っています。

じいたん